

## 【論文】

## 「日本語＝日本人」という規範からの逸脱

「在日コリアン」教師のアイデンティティと  
日本語教育における戦略

田中里奈\*

## 概要

本稿は、「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリーから、「日本語＝日本人」という規範が強い日本語教育において、その規範からの逸脱者がどのように自己を位置づけてきたのかを明らかにすることを目的とする。インタビューの結果、社会生活においては、「在日コリアン」というカテゴリーで括られたアイデンティティを拒絶しているにも関わらず、日本語教育の現場においては、日本語ネイティブの「在日コリアン」であることを強く表明していることが明らかとなった。そうした戦略を使わざるを得ない教師の前には、たとえ日本語のネイティブであっても、規範から逸脱しているために疎外されてしまう現実があるといえる。このことから、「日本人性」が付与された日本語の存在とそれを容認する日本語教育の実態が示唆された。

## キーワード

「日本語＝日本人」、 「在日コリアン」教師、 アイデンティティ、 ネイティブ、 戦略

## 1. 問題の所在と研究目的

1980年代以降、日本には「中国帰国者」、 「インドシナ難民」、 「日系人」などの多くのニューカマーが来日している。このような「移住者」1世の多くは、出身国で「母語」<sup>1)</sup>を身につけてから来日するに対して、日本で生まれた2世以降の人々の多くは、日本で「母語」として日本語を身につけていく。今後は、滞在の長期化や定着によって、日本語を「母語」として身につけてはいるが「日本人」ではない人々の増加が予想される。そのような状況は、素朴に信じられてきた「日本語＝日

本人」といった図式、つまり、単一民族国家観に起因する国語ナショナリズムの再考と解体をこれまで以上に強く迫ってくるはずである。

そもそも、「日本語」と「日本人」とを強固に結びつけようとする思想は、イ(1996)が指摘しているように、日本が近代国家を形成していく過程で創出された。当時、国語学者であった上田万年は、巧妙な論理のすり替えによって「国語は日本人の精神的血液である」といった反論しがたい主張を作り上げ、日本語によって国民をまとめあげようと試みたのである。そして、「日本語＝日本人」といった思想は、「日本語」を教えることで「日本人」への同化を試みた帝国主義体制下の日本語教育にも引き継がれていった。しかし、こうした思想は、終戦とともに消えたわけではなく、「日本人の話す日本語」や「正しい日本語」の習得が目指されている戦後の日本語教育においても依然として根強く残っている。

近年では、このようなイデオロギーが引き継がれている日本語教育学に対する批判として、学会誌『日本語教育』に掲載された論考の言説分析(牲

\* 山口福祉文化大学ライフデザイン学部・早稲田大学大学院日本語教育研究科 (r.tanaka@hagi.ac.jp)

1 田中克彦(1981)は、「母語(mother tongue)」と「母国語(national language)」が混同されていることを指摘している。本稿では、前者を、「生まれて初めて身につけ、無自覚のまま自分のなかにできあがってしまったことば」(p. 29)と捉える。一方、後者を「母国のことば」(p. 41)とし、国家と結びつけた概念とする。

川, 2004a, 2004b, 2006, 2008), 日本語教科書の内容分析(田中, 2006a, 2006b)等の研究が行われている。また, 鄭(2010)においては, 日本語学習者へのインタビュー調査から, 「正しい日本語」としての「日本人の日本語」と「外国人の日本語」という「二分化された日本語」の存在とその問題点が指摘されている。三代・鄭(2006)は, こうした研究動向を概観し, 「日本語＝日本人」という思想の問題点として, (1) その成立過程の歴史的問題, (2) それによる差異化の問題, (3) それによるコミュニケーション阻害の問題, の3つに分類している。しかしながら, 日本語教育における単一民族国家観に支えられた国語ナショナリズムの解体を目指すのであれば, 研究の蓄積は未だ十分とは言えないのが現状ではないだろうか。

例えば, 従来の研究は, 日本語教育という研究領域であるからか, 「正しいか/正しくないか」といった言語学的な観点からの「日本語＝日本人」への批判, つまり, 日本人の話す日本語を「正しい日本語」として頂点に据えようとする言語観への批判という側面を強くもっている<sup>2</sup>。しかしながら, 視点を変えて考えてみると, 「母語」は日本語であるが日本人ではない人々の存在は等閑視され, 日本語の話者として日本人のみが想定されてしまっていることに対する十分な批判は行われてこなかったのではないだろうか。

以上のような問題意識に基づき, 本稿では, 日本語を「母語」とはするが, 「日本語＝日本人」という規範からの逸脱者<sup>3</sup>として, 「在日コリアン」<sup>4</sup>に着目する。日本語を「母語」とはするが日本人ではない彼らは, 自分自身をどのように捉え,

「日本語＝日本人」という言語観の強い日本語教育の中に自己を位置づけてきたのであろうか。

## 2. 先行研究

「在日コリアン」に関する研究は, その生活史やアイデンティティに焦点化されたものだけでもかなりの蓄積がある。アイデンティティ形成と葛藤の類型化研究(福岡, 辻山, 1991; 福岡, 1993)や, そのような本質主義的なアイデンティティを批判的に捉えた研究(金, 1999; 鄭, 2003; 李, 2008)などがあげられる。また, 彼らのアイデンティティと言語に着目した研究としては, 平田(2005), 鄭(2005), オストハイダ(2006), 徐(2008)などがあげられる。平田(2005)は, 作家・鷺沢萌の韓国での言語経験をもとに, アイデンティティの複数性・流動性を論じている。そして, そうした「雑多で混淆としたアイデンティティ」を表現するための「不純で不完全なごちゃ混ぜ言語」の必要性を指摘している。また, 徐(2008)は, 「母語」である日本語と「母国語」である韓国語による自身の言語経験をもとに, 「母語」「母国語」「国民」を等式で結び付けようとする国語ナショナリズムに支配されている韓国語と日本語を批判的に考察している。

しかしながら, 日本語教育という領域において, 「日本語＝日本人」という規範からの逸脱者として「在日コリアン」が注目されたことはほとんどなく, 田中(2011a)以外には研究成果は公表されていない。田中(2011a)は, 韓国に「帰国」<sup>4</sup>して日本語教育に従事している人々のライフストーリーから, アイデンティティの変容と日本語への意味づけを捉えようとしている。そこでは, 「韓国人」や「在日コリアン」という既存のカテゴリーで括られ

2 例えば, 大平(2001)は, 従来の言語学研究における「ネイティブスピーカー」「ノンネイティブスピーカー」の定義を概観し, 「母語話者・ネイティブスピーカー＝標準」, 「非母語話者・ノンネイティブスピーカー＝逸脱」という前提を問題化している。

3 本稿では, 日本における国籍表記の如何を問わず, 日本に居住している/いた朝鮮半島に民族的なルーツをもつ人々に対する総称として「在日コリアン」という用語を用いる。任(1993)によると, 「在日コリアン」2世・3世以降は, 韓国語を「母国語」と認識しつつも, 日本語を「母語」として身につけており, 現在, そのほとんどが「日本語モノリンガル」である。

4 「帰国」は, 厳密には, 「自身が元々いた場所に戻る」ことを意味することばであるが, 本稿では, 日本に居住していた「在日コリアン」が民族的なルーツである韓国に長期的に住むことを目的に渡韓することを意味することばとする。なお, 日本での特別永住権の有無に関わらず, 「帰国」ということばを用いる。インタビューにおいて, 「帰国」「帰還」「戻る」「帰る」「行く」などのうち, どれが一番適切であるか話し合い, 「帰国」ということばで統一することとなった。しかし, 用語として「帰国」ということばが妥当であるかは現在も検討中である。

てしまうことに拒絶感を抱いているにも関わらず、日本語教育の現場では、日本語のネイティブである「在日コリアン」というカテゴリーによって差異化を図ろうとする彼らの姿が描かれている。しかし、どのように差異化を図ろうとしているのか、また、そのことが日本語教育において一体何を意味しているのかに関しては、詳細には論じられていない。

そこで、本稿では、田中(2011a)同様、日本語教育に携わってきた「在日コリアン」教師のライフストーリーを取り上げ、「日本人のような日本語を」といった目標が掲げられがちな日本語教育という空間の中で、日本人ではないが日本語を「母語」とする彼らが、どのような戦略<sup>5</sup>を用いて自身をその空間に位置づけようとしてきたのかに着目する。日本語教育という空間において、「母語」と国籍のズレがどのような意味をもつのかを明らかにすることを通して、日本語教育のもつ思想を従来の研究とは異なる角度から考察したい。

### 3. 研究方法

本研究は、個々の具体的な経験とそれに対する意味づけ、認識の変化を明らかにすることを目的としている。そのため、HermannsのNarrative Interview (Flick, 1995/2002)に従ってライフストーリーの聞きとり調査を行い<sup>6</sup>、語り手の経験や

意味世界を丁寧に解釈していくことにした。研究協力者は、スノーボール・サンプリング法によって選ばれた、「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師9名<sup>7</sup>である。一人につき1～4回、各1時間半～5時間程度のナラティブ・インタビューを行い、その際の録音データを文字化したもの、フィールド・ノーツ、メールでのやりとりをデータとした。本研究では、個人の人生の軌道を再構成するWengraf(2001)のナラティブ分析を主に採用することとした<sup>8</sup>。本稿では、9名の研究協力者のうち、平均4時間程度のインタビューを計4回行い、量的にも質的にも全体のライフストーリーを十分に聞きとることができたVの語りを取り上げる。

#### 【データVの概要】

- 性別 女性
- 在日 2世
- 出生年 1948年
- 帰国年 1979年
- 日本語教育 1979年～
- 調査日 2009/10/24, 2009/12/28,  
2010/8/24, 2011/3/19
- 調査地 ソウル

以上のような方法で収集、分析したデータをもとに、次章では、具体的な語りを示しながら、「在日コリアン」教師のライフストーリーと日本語教育における位置取りの戦略を捉えていく。なお、インタビューデータのトランスクリプションに関しては、概ね桜井(2002, pp. 177-180)に従った。Vはインタビュー協力者を、\*はインタビュアーである筆者を示す。また、データを本文中で引用す

5 Bourdieu(1979/1990)の用いた「戦略」の概念を本稿では採用する。「長期的な観点に立って熟考検討の結果練りあげられた、一連の自覚的な生活の組み立て方」で、「ハビトゥスの無自覚的な計算(実践感覚)によって慣習行動を方向づけてゆく暗黙の行動原理といったニュアンス」(石井, 1993, p. 158)を含む語として本稿では用いることとする。

6 インタビューでは、まず初めに、筆者が研究協力者に対して「ナラティブ生成質問」をし、生まれてから今日に至るライフストーリー全般を自由に話してもらった。次に、全体の流れを整理しつつ、筆者から質問を投げかける形でインタビューを進めた。なお、ナラティブ生成質問の後、協力者による語りが続く場合は、傾聴マーカ以外、極力口を挟まないようにし、筆者による構造化が入らないよう心がけた。インタビューにおける使用言語は、日本語、または、韓国語のいずれかを協力者に選択してもらった。韓国語の使用は単語や短いセンテンス程度で、インタビューの大部分は日本語で行われた。

7 9名の内訳は、在日コリアン2世の日本語教師6名、3世の日本語教師3名である。しかし、在日1世の両親が幼少期に来日したため、両親もほとんど韓国語を話さないケースや在日1世と2世の両親の間に生まれた人のケースなど、単純に2世・3世と分けることはできない。

8 ナラティブ・インタビューから得られるデータは半構造化インタビューのデータとは異なり、構造化の度合いが低い膨大なテキストである場合が多く、分析にはかなりの困難が伴う。そのため、本研究では、語りの内容をより深く解釈していくための指針として、人生の軌道を再構築するWengraf(2001)のナラティブ分析の方法を採用した。

る場合には、【 】を用いて挿入した<sup>9</sup>。

#### 4. 「在日コリアン」教師の経験の語り

##### 4.1. Vさんの経験の語り①——アイデンティティの捉え方

Vさんは、1948年に名古屋で生まれた、現在62歳の在日2世の女性である。彼女の両親は在日1世ではあるが、家庭内で韓国語を使うことはほとんどなく、「在日コリアン」がほとんどいない地域に居住していたため、彼女は日本の公立学校に通い、【完全な日本文化】の中で生まれ育った。日本での受験戦争を経て、4年制大学の英文学科に進学した彼女は教師になることを目指していたが、国籍条項の関係から英語教師として働くことを断念せざるをえないことを知り、【「制度圏」<sup>10</sup>に入りたいという人生の目標】を抱くようになった。その後、留学生として来日していた韓国人男性と結婚し、出産・育児を経て、1979年、配偶者の仕事の都合で【韓国に行く】ことになった。Vさんにとっての初めての韓国生活は31歳にしてようやく始まったのである。「帰国」当初、Vさんは韓国語がほとんど話せなかったが、日本語を学びたいと家に押し掛けてくる近所の主婦たちと交流を重ね、それがきっかけで、日本語教育に興味をもつようになった。その後、学院（日本語学習塾）で時間講師として授業を担当しながら、修士課程に進

9 この他のトランスクリプションに関しては以下の通りとした。① 重複発話にはその発話が始まった地点にブラケット ([ ]) を挿入した。② 話されているところに短い発話（相槌など）が挿入されている場合は、/// の中に示すこととした。③ 発話の流れの中での沈黙は（・・・）で示すこととした。・は1秒を示す。④ 音の引き伸ばしに関しては、長音（—）記号を用いた。⑤ 疑問文で終わってない発話の上昇音調は疑問符 (?) を用いて示した。⑥ 笑いに関しては、hhh で示すこととした。h の数は笑いの長さを示す。

10 「制度圏」ということばは語りの中でかなり頻繁に用いられている。Vさんは、韓国語の「제도권（制度圏）」をそのまま直訳して用いているのだが、具体的には、【その人自身の意思や努力を認めてくれるシステム】のことを示し、【この制度の中にいることで、人間は社会の一員として生きていける】と捉えている。

学し、学位を取得した後は、大学などで授業を掛け持ちしながら日本語教育に携わってきた。一時は、大企業の中央研修院において専任講師を勤め、その後、主任講師として人事や事業計画などにも携わっていたが、Vさんの日本語教育の経歴のほとんどは、年単位で雇用契約を結ばなくてはならない役職から成り、非常に不安定な労働環境で日本語を教え続けてきた。

Vさんが韓国に「帰国」した1979年、旧宗主国のことばであった日本語は、一部の韓国人の興味の対象とはなり得ても、一般的には、依然として【非常に冷やかな視線】が投げかけられる言語であった<sup>11</sup>とVさんは語る。そのような視線をVさんの二人の子どもたちは敏感に感じ取り、日本語を話すVさんを避けたり、日本語を知っていても一切使わなくなっていった。日本人ではないが、日本語を「母語」とするVさんは、家族や親戚との付き合いの中でも【かなり肩身の狭い思いを何度もし】、【自分の中から日本的なものをなんとかして消そう】、【韓国人にならないと】と思ったという。このような考えから、家庭内で日本語を全く使わなくなり、2人の子どもへの教育も韓国語のみで行った。しかし、【両親の祖国が韓国というだけで、私は所詮韓国に「来た」人間なんですよ】と語っているように、どんなに【韓国人になりきろう】と思っても、既存の「韓国人」というカテゴリーに自身を位置づけることなどでできず、また、韓国での生活が長くなるにつれ、【もはや私は在日コリアンでもない】という感覚をもつようになっていったと語る。

V : 日本にいる在日コリアンが権利獲得のために努力してきたというか、そういう活動とかプロセスに参加していないし、異なってきたしまっているんです。（中略）それに・・・日本にいる普通の在日コリアンとは違って、私は母国での現実と戦っているんですよ。こちらに来て色々な悲しい経験もしましたし。

11 こうした日本語に対する緊張感は、Vさん特有のものではなく、日本語を一切使わずに生活しようとした在韓日本人妻のライフストーリー（山本、1996）や、日本語学習に複雑な想いを抱いていた韓国人学習者のライフストーリー（田中、2011b）等でも指摘されている。

ですから、在日コリアンというカテゴリーで語られてしまうことにも非常に違和感を感じるんです。(2010/8/24)

Vさんは、自身を「韓国人」や「在日コリアン」というカテゴリーに位置づけようと必死になったが、結局断念したプロセスを踏まえ、以下のように語り続けている。

V : どこかに帰属せよとか、所属しろと言われても、できない自分があるんですね。

\* : じゃあ、どこかに所属したいという考えを強く持たないというそういう生き方を先生が受け入れたという……。

[  
V : いえ、帰属はしたいんです。帰属はしたいんですが、帰属できない自分というのを、受け入れるということにしたんです。(中略)無理やり自分をカテゴリーに当てはめる必要はないし、当てはめられても同じわけないんですから困りますよね。在日コリアンって言ったって、本当に色んな人がいるわけなんですから。

(2010/8/24)

Vさんは「どこかに帰属すること」を幼い頃から渴望してきたが、様々な経験を経て、カテゴリーに収まりきらなくてもいいと現在では考えるようになったと語っている。また、上記の語りからも明らかのように、Vさんは、一般の社会生活を送る上では、経験や考え方の差異を一緒くたにする「在日コリアン」というカテゴリーに回収されてしまうことにも戸惑いを感じているとともに、カテゴリー自体を懐疑的に捉えるスタンスをもっている。

#### 4. 2. Vさんの経験の語り②——日本語教育における位置取りの戦略

それでは、このような考えをもつに至ったVさんは、日本語教育という現場ではどのように自身の位置取りを行っているのでしょうか。これに続く日本語教育の現場に関する語りは、非常に対照的なものとなっていた。

V : 授業を始めるときに、まず一、自分が在日であることを話しますね。何歳まで日本に住んで、日本語のネイティブですとか。履修登録の時のシラバスにも書いておいたり…。やはり日本に長く住んで一、私の場合は、実際に受験戦争も経験したし、会社勤めや出産、育児だって日本でしたんですよ…。ですから、韓国で日本語を外国語として勉強した先生方とは違って、尊敬も謙譲語も完璧に使えたわけです。

(2011/3/19)

Vさんは、日本語教育という現場では、意識的に自分が「在日コリアン」であり、日本語のネイティブであることを強く表明している。上記の語りからも垣間見えるように、それは、韓国で外国語として日本語を学んだ韓国人教師との差異化を図るためである。【外に出たものだけは韓国。内側を見ると全く日本人と同じ】と語るVさんの国籍は韓国だが、「母語」は日本語である。【外に出たものだけは韓国】であるからこそ、自分が日本語のネイティブであることを意識的に示さないと、韓国人教師の中に容易に埋もれてしまうことをVさんは強く意識しているのである。

V : 昔、私が履歴書を出していた頃は、名前がですね、私の場合は、Vですから、もう、学生たちが見たら韓国人ですよねー?// うーん…//で、日本人の先生に習ってみたいとか憧れがあるじゃないですか。

(2009/12/28)

V : 日本語の原語民先生のインタビューを学生たちがして、学校側に対してネイティブを増やしてほしいって記事にしたことがあったんですが…。私はインタビューすら受けなかったんですから。

(2011/3/19)

Vさんは日本語教育の現場においても、もちろんVという本名を使用しているのだが、日本語のネイティブに習いたいと考える学生たちにとって、自分はその対象として認知されにくいことを指摘している。このことは、学生との間だけではなく、

採用する側の大学との間でも、大きな意味をもつことをVさんは以下のように語っている。

V : 日本人教授がいるということが、非常にその大学の売りというか、になったんです。というのは、日語日文学科に日本人の名前が一人もないということは、hhh ちょっとやはり・・・ですね、日本人講師がいるってということがとても重要なことなんです。(2010/8/24)

Vさんは職場を確保し続けるためにも、大学院に進学し、修士号の学位を取得している。しかし、Vさんは、【韓国人の名前をもつ】ということが理由で、学位も経験もない日本人や日本国籍をもつ在日コリアン、【より日本人に見える日本人の名前を使っている在日コリアン】に取って代わられてしまったことすらあったという<sup>12</sup>。韓国籍、韓国人名を名のるVさんは、韓国人教師と同じ土俵で戦わなくてはならず、その場合に頼れるのは自身の「ネイティブ性」であったと語る。

V : 私の場合は、日本で生まれ育ったネイティブですが、日本国籍をもたないネイティブでしたから、韓国に来て仕事をする場合は、ネイティブのように正しくきちんと話せるということだけが・・・、私の看板になる。ですから、私はそれに注目せざるをえない立場だったわけですね。自分の仕事を守るために、ひいては、自分の生活を守るために。学生にも実際に役立っているし・・・。これからの韓国社会にはネイティブだけを目標としない教育も必要ではあるけれど・・・。(2010/8/24)

12 徐(2008)でも指摘されているように、韓国は単一民族国家観に起因する国語ナショナリズムが比較的根強く残っている社会である。それに加え、近年、韓国においても、大学評価が重要な意味をもつようになってきており、大学の国際化を測る基準の中には、外国人の教員が何名所属しているのかを点数化する項目もある(조선일보, 2011)。Vさんが日本人や日本国籍の在日コリアンに職場のポジションを奪われてしまった背景にはこのような流れがあったことも考えられる。

「正しい日本語が話せる」が「日本国籍を持たない」「日本人の名前を持たない」ということは、「日本語のネイティブ＝日本人」、「日本語のノンネイティブ＝外国人」という図式が当然視されている環境においては、理解されにくい存在として容易に排除の対象になりうることを物語っている。それに対する戦略として、Vさんは、日本での長い居住歴や様々な経験、自身が在日コリアンで日本語のネイティブであることを強く主張し、【より日本人に近い韓国人】として自身を規定し直そうとしている。このことは、そのように日本語のネイティブであることを戦略的に表明しなければ、日本語教育の現場では自分のポジションを維持することが難しかったという現実があったことを示しているのではないだろうか。

一方で、Vさんは、日本人ではない自分の「母語」が日本語であったり、日本語を話す多くの日系人などの存在を考えると、日本語の話者として日本人を想定する必要も、「正しい日本語」を話す必要もない、【もっと多様な日本語を認知していくといった方向】を目指すことが当然必要であると頭では理解しているとも語っている。しかしながら、「日本語のネイティブ」であることだけが自分を守ってくれるという現状においては、教室の中でそれを積極的に目指すことはできないのだという。

そして、ネイティブであるのに「日本語＝日本人」という図式に入れないVさんの葛藤の語りは、以下のように続いていく。

V : むしろノンネイティブならうまく納まっているし、日本語さえうまくなればそれはそれとして認められますよねー?でも、ネイティブなのに日本人じゃないって努力のしようがないというか・・・。思い切って国籍を変えてしまおうとか・・・。//うーん//・・・でも・・・、ネイティブであることを変えることはできないんですから。(2010/8/24)

もしノンネイティブであるなら、努力して日本語さえ上手になれば、「ノンネイティブ＝外国人」という図式の中のより高い位置に移動することができ、【ノンネイティブの中の優れた教師】として認められてもらうこともできるはずだとVさんは主

張する。しかし、日本人ではないネイティブのVさんには、「ネイティブ=日本人」という図式、つまり、「日本語=日本人」という規範から逸脱しているために、周囲から正当に評価されないという不満と正しく認知されないという不安を抱かざるをえない実情があるのだという。【ネイティブであることを変えることはできない】という語りは、自分自身の「母語」を交換することはできないという主張だと解釈できるが、それなら、【国籍を変えてしまう】という選択肢がVさんの頭には浮かぶ。このことは、【外に出た】韓国的な要素を日本に変えることによって、「母語=日本語=日本人」という図式にさえ入ってしまえば、国語ナショナリズムの流れに乗ってしまえば、より正当に評価され、認められるはずだという考えがVさんの中にあることを示している。【ネイティブなのに日本人じゃないって努力のしようがない】という語りには、そのような思想の根強い日本語教育という空間におけるVさんの生きにくさが表出されているといえる。

## 5. 結論

以上の語りを概観すると、Vさんは、日々の社会生活の中ではカテゴリー化されることに強い違和感を覚えているにもかかわらず、日本語教育という現場ではあえて、【日本語ネイティブであること】【在日であること】を前面に打ち出すという戦略を用いていることがわかる。そして、そうした戦略を使わざるを得ない彼女の前には、「国籍」と「言語・文化」のズレから生じている、たとえ日本語のネイティブであっても「日本語=日本人」という図式の中に入れない現実があり、常にそのことに対する葛藤があることが読み取れる<sup>13</sup>。

従来の日本語教育学において、「日本語=日本

人」という思想は、主に、日本人を頂点としたいいわゆる「正しい日本語」が話せるか否かといった言語学的な観点から議論が行われてきた。そこでは、「正しくない日本語」を排除する思想が問題化されてきたが、日本語教育における「日本語=日本人」という図式の問題はそれに留まらない。いわゆる「正しい日本語」を話す「日本語のネイティブ」であっても、日本人ではないこと、日本国籍や日本名をもたないことは、単一民族国家観に起因する国語ナショナリズムの規範から逸脱していることを当然意味する。つまり、「日本語=日本人」という思想の根本的な問題は、「その日本語が正しいか否か」という視点に加え、「誰がその日本語を話しているのか」といった話者の所属に注意が払われてしまうことだといえる。

インタビュー調査開始当初から、筆者は、自らも日本語を「母語」としている「在日コリアン」教師が、なぜ「日本人のような日本語」を学習目標として授業において設定しようとするのか、という疑問を抱いてきた。彼らのように、「日本語=日本人」という図式から逸脱している教師の方が、そういった図式を崩していくような思想をもち、新たな実践を生み出すことができるのではないかと考えていたのである。しかし、インタビューを進めていく中で見えてきたものは、普段の社会生活においては、単なる「在日コリアン」としてカテゴリー化されてしまうことを否定的に考えているにも関わらず、日本語教育という現場では、「日本語=日本人」という図式に最も近い「在日コリアン」として自己をあえて再規定しようとする彼らの戦略であった。このことは一体何を示しているのであろうか。「日本語=日本人」といった規範が強く、価値が置かれる空間においては、「日本人のような名前」や日本国籍をもつということは、それだけで、日本語のネイティブであることを十分に体現していて、あえて日本語のネイティブであることを声高に訴える必要などない。しかし逆に、日本国籍や日本名がないということは、たとえ日本語のネイティブであっても、その図式には入ることができないため、自己をその図式により近づけるための何らかの戦略が状況的に必要となってくるのである。筆者は、「日本語のネイティブであること」に権威をもたせるような考え方や、ある言語の「完璧な所有者」として振る舞おうとするVさんの戦略自体を決して肯定的に捉えているわ

13 「在日コリアン」教師たちの経験とその意味づけは多岐に渡り、それぞれのライフストーリーには当然のことながら全く同じものはない。しかし、教師たちの多くは、韓国人教師との差異化を図り、現場での自身のポジションを確保するために、日本的な要素を前面に出すなど、何らかの戦略をとっていた。このことは、特に、時間講師や兼任教授など、年単位で雇用契約を結ぶ形態で勤務している教師たちによってより顕著に語られる傾向があった。

けではないが、そうした戦略をとらざるを得ない状況にいる人々を批判することはできないと考える。批判すべき対象は、「日本語＝日本人」という図式に自分自身を近づけようとさせてしまうほど、国語ナショナリズムに依然として覆われている日本語と、そうした言語観が人々に共有されている現状、さらには、依然としてそのような現状に追隨している日本語教育の思想のほずである。

日本語教育には、帝国主義体制下において、植民地化した地域の人々のことばを日本語に置き換えようとした歴史がある。「日本語＝日本人」という規範から逸脱している人々は、その当時から相当数いたのである。それにもかかわらず、戦後の日本語教育においても、そうした逸脱者の存在が取り上げられたことはなかった。それは恐らく、日本語教育が基本的には「日本語を教える」学問領域として発足され、日本語の言語形式や教育の方法など、日本語を教えるために必要な内容を中心に研究が進められてきたからだと考えられる。しかし、日本語教育が行うべきことは、「日本語を教えること」だけなのか、という疑問が残る。国語ナショナリズムを内包したままの日本語を、「日本語＝日本人」という図式からは逸脱し続けるしかない学習者に教える者こそが、そうした思想の再考と解体のために、日本語をより開かれたものへと作り変えていくことを目指していく必要があると考える。そのためには、新たな日本語教育の実践を構築していくことはもちろんのこと、教師や学習者などだけではない、日本語教育に直接関係のない人々も巻き込み、そのような言語観の見直しを迫っていくことが必要である。「在日コリアン」に限らず、「日本語＝日本人」という規範からの逸脱者を正統な話者として承認する日本語空間を構築していくためにも、今後も、可視化されてこなかった人々の語りに耳を傾け、広く問題提起を行っていききたい。

#### 文献

- 石井洋二郎 (1993). 『差異と欲望——ブルデュー「ディスタンクシオン」を読む』藤原書店。  
 イ・ヨンスク (1996). 『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波書店。  
 大平未央子 (2001). ネイティブスピーカー再考『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』(pp. 85-110) 三元社。

- オストハイダ・テーヤ (2006). 「母国語」か「母語」か——日本における言語とアイデンティティの諸相『近畿大学語学教育学部紀要』6(1), 1-15.  
 金泰泳 (1999). 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて——在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社。  
 桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。  
 徐京植 (2008). 母語と母国語の相克——在日朝鮮人の言語経験『東京経済大学人文自然科学論集』126, 33-55.  
 牲川波都季 (2004a). 日本語教育における言語と思考——その意味づけの変遷と問題点『横浜国立大学留学生センター紀要』11, 61-85.  
 牲川波都季 (2004b). 日本語教育学における「思考様式言説」の変遷『日本語教育』121, 14-23.  
 牲川波都季 (2006). 『戦後日本語教育学とナショナリズム——「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文。  
 牲川波都季 (2008). 日本人の思考の教え方——戦後日本語教育学における思考様式の言説『文化, ことば, 教育』(pp. 106-128) 明石書店。  
 田中克彦 (1981). 『ことばと国家』岩波新書。  
 田中里奈 (2006a). 戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題——日本語教科書に見る「国家」、「国民」、「言語」、「文化」『リテラサイズ』2, 83-98.  
 田中里奈 (2006b). 「国家」「国民」「言語」「文化」の結びつき——戦後から1980年代における日本語教科書の内容分析と作成者の論考を中心に『早稲田大学日本語教育研究』9, 77-91.  
 田中里奈 (2011a). 「カテゴリー」化されることへの拒絶とその戦略的利用——在日コリアンとして生まれ育った在韓日本語教師の「日本語」をめぐる語りを手がかりに『移民研究年報』17, 97-108.  
 田中里奈 (2011b). 日本語の学習はどのように選択され、意味づけられたのか——1960～70年代に日本語を学び始めた韓国人日本語教員のライフストーリーからの一考察『日本語教育史論考 2』(pp. 147-160) 冬至書房。

- 鄭京姫 (2010). 「二分化された日本語」の問題——学習者が語る「日本語」の意味に注目して『リテラシーズ』7, 1-10. <http://literacies.9640.jp/vol07.html>
- 鄭暎恵 (2003). 『〈民が代〉斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.
- 鄭暎恵 (2005). 言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ『脱アイデンティティ』(pp. 199-240) 勁草書房.
- 任榮哲 (1993). 『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版.
- 平田由美 (2005). 非・決定のアイデンティティ——鷺沢萌『ケナリも花, サクラも花』の解説を書きなおす『脱アイデンティティ』(pp. 167-198) 勁草書房.
- 福岡安則, 辻山ゆき子 (1991). 『同化と異化のはざままで——在日若者世代のアイデンティティ葛藤の詳細』新幹社.
- 福岡安則 (1993). 『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』中公新書.
- 三代純平, 鄭京姫 (2006). 「正しい日本語」を教えることの問題と「共生言語としての日本語」への展望『言語文化教育研究』5, 80-93.
- 山本かほり (1996). 在韓日本人妻の生活史『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』(pp. 62-88) 世界思想社.
- 李洪章 (2008). 肯定性を生きる戦略としての「語り」と「対話」——在日朝鮮人=日本人間「ダブル」のライフ・ストーリーを事例として『京都社会学年報』16, 75-96.
- Bourdieu, P. (1979). *La distinction: Critique sociale du jugement*. Paris: Les Editions de Minuit. (ブルデュー, P., 石井洋二郎 (訳) (1990). 『ディスタクシオン——社会的判断力批判』藤原書店.)
- Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag. (フリック, U., 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) (2002). 『質的研究入門』春秋社.)
- Wengraf, T. (2001). *Qualitative Research Interviewing*. Sage Publications.
- 조선일보 (2011). 아시아 대학평가 (2011.5.25 発行).

付記 長時間にわたるインタビュー調査に快く応じてくださった方々に厚く御礼申し上げたい。なお、本稿は、平成 22 年度文部省科学研究費補助金研究活動スタート支援(「韓国人学習者の日本・日本語への葛藤と受容の経験に関するライフストーリー研究」, 課題番号: 21820054, 研究代表者: 田中里奈)の交付を受けて行われた研究成果の一部である。

(2011 年 4 月 30 日受付)

Research Paper

# Deviation from the criterion of “Japanese Language = Japanese People”

## Identity of a “Zainichi-Korean” educator and her strategies of positioning in Japanese language teaching

TANAKA, Rina\*

### Abstract

In the field of Japanese Education, there is still a strong criterion of “Japanese Language = Japanese People.” This study focused on how “Zainichi Korean” Japanese language educators had placed their position in that field. Based on the life history analysis, I found that they strongly expressed their identity as “Zainichi Korean” and “Japanese native speaker” in the classroom although they hated to be seen as them in their daily life. This contradictory behavior seems to be their strategy to survive the situation where the deviation from the criterion was not accepted. To date, many studies of other researchers have pointed out the problem contained in the criterion of “Japanese Language = Japanese people,” which is the concept of “incorrect Japanese should be excluded.” The results of this study suggest that the criterion poses not only the issue of the exclusion but also of speaker’s attribute.

### Keywords

“Japanese Language = Japanese People”, “Zainichi-Korean” Educator,  
identity, native speaker, strategy

---

\* Faculty of life design, Yamaguchi University of Human Welfare and Culture;  
Graduate school of Japanese applied linguistics, Waseda University.  
*E-mail address*: t\_riina0917@hotmail.com